



TITLE:

<批評・紹介>曾我部静雄著「中國及び日本における郷村形態の變遷」

AUTHOR(S):

日比野, 丈夫

---

CITATION:

日比野, 丈夫. <批評・紹介>曾我部静雄著「中國及び日本における郷村形態の變遷」. 東洋史研究 1964, 22(4): 508-511

ISSUE DATE:

1964-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/152650>

RIGHT:

おきたい。それは漕運の變遷をもつと財政あるいはより廣く社會經濟一般と密接に關聯して解明してほしいということである。たとえば明初の海運は前線に對する軍事的な補給という意味が中心だったが、北京遷都以後は全く別の意味が加わった筈である。そのことに少しはふれられているけれども、政府の財政運営の方式が、南京時代と北京遷都以後とは、かなり變っているわけで、その間にあって漕運の果たした役割はどうだったのか。また田賦銀納の普及と漕運との關係はどうだったのかなど、もう少しまとめて述べてほしかった。別の方からいえば、北京への漕運は首都の食糧問題とも大きな關聯があったと思われる。そういう種々の面から考察することによって、漕運という大きな制度の、充分な意味を明かにすることができのではあるまいか。

心せくまに書き連ねたので、あるいは措辭當を失し、あるいは言う所を外れているかも知れない。著者ならびに讀者の寛容を願う次第である。

(岩見 宏)

# 中國及び古代 日本に於ける 鄉村形態の變遷

曾我部 靜雄 著

昭和三十八年三月 吉川弘文館  
A5判 四九七頁 索引一一頁

本書が公けにされてからまだ一年にもならないのであるが、著者は早くもその間に「日中律令論」（日本歴史叢書、吉川弘文館發行）という一書を世に問われた。うっかりしていると、紹介の方が

ついていけないほど、息もつかせない業績の續出に、まったくわたくしども後學は目をみはるばかりである。序文にもあるように、著者が中國の鄉村機構の變遷に興味をもたれたのはすでに二十年も前のことで、それいらいぞくぞくと發表された數々の論文からは多大の教えを受け、これを利用していただいたことであつた。また中國史の立場から日本古代史の研究にも視野をひろげ、この問題について論陣をはられたことは國史學者にも相當の影響をあたえたに相違ない。

中國の鄉村機構は家族制度とともに、社會生活の基礎をなすものとしてきわめて重要な研究課題であることはいうまでもないであらう。しかし、これを歴史的にみればあい、文獻の上ではもっぱら制度の面だけが強くあらわれ、實際の集落との關係がどうなっているかはすこぶる明らかでないのである。古い時代にさかのぼればさかのぼるほどそうなのであつて、秦漢の鄉亭里制度の問題がながらく紛糾したのも、唐の隣保制度の實體が容易につかめなかつたのもそのためである。明のような資料のととのつた新しい時代になつても、里甲制の實施狀態については疑問の點が少くない。おそらく中國のように廣大な、地域差のはげしいところでは、こうした制度を劃一的に考えること自體が無理なのかも知れず、従つて鄉村機構の變遷を歴史的に體系づけることなどは難中の難事といわねばならぬ。その意味において、この難事をあえて試みられた著者の努力は高く評價すべきであると思う。

まず表題の鄉村形態ということばであるが、全體を通じて感じられたところでは自然集落そのものの形態よりも、政府がそれをどのような形で把握したかということに重點がかかっているようであ

る。つまり政府が徴税と治安の必要から、自然集落を人為的に分合組織してつくった行政村ないし警察村ともいべきものの形態なのであって、これは文獻資料を中心とする以上やむをえないところであろう。つぎに内容の概略をのべると、第一章「中國古代の集落形態」では、古代の自然集落として基本的なものは二十五家平均の社で、これに對する人爲集落が邑であつたが、春秋戰國時代にいたつて新しく郷と里という大小の集落名が生まれ、やがてその上に縣と郡という行政區劃が設けられて地方制度が整備されたとする。第二章「秦漢及び均田法時代の郷村形態」では、このようにして整備された地方制度の末端組織である郷里制は、多くの變遷をへながらも約千三百年にわたつて生命を維持しつづけてきたと説き、獨特の創見を隨所に示している。

例えば郷亭里の制度で、いうまでもなくこれは漢が秦からうつていだものである。その實體がいかなるものであつたかはともかく、普通にこの制度そのものは漢代を通じ一貫したものと考へられていたのに對し、著者が前後漢の間に一線を劃されたのは注目にあたいする。すなわち前漢書百官公卿表にみえる「十里一亭」の里は距離であるとし、もともと公設宿泊所であるとともに治安維持機關である亭を中心として、前漢のとき行政區劃を設定したのは戰國、秦の軍政をうけつていだからであるとする。前漢の行政區劃單位は面積を基準とした郷と亭であつて、それが後漢になると民政主義に改めた結果、新たに百戸一里の里制が採用され、里が郷に直屬して亭は行政區劃單位の外におかれるようになった。つまり郷里制は後漢にいたつて確立されたとみるべく、後漢書百官志注に引かれた應劭の風俗通の文に「國家制度、大率十里一郷」とある里こそ、戸數による

行政里にはかならないとするのである。

つぎは唐代のことで、百戸を一里として里正をおき、五里を一郷とする郷里制と、通典の食貨の卷にみえる村制とがいかなる關係にあるかという問題である。それによれば田野にある村には村正をおき、城内の坊には坊正をおくとあるが、里正との職掌の別が明らかでない。著者はこれを規定して、主として里正は租稅徵收に、村正または坊正は治安維持にあたるものとした。村制はむかしの亭の復活とみることもできる。つまり郷里制は帳簿上でつくられたあくまで人爲的な、民衆の實生活とは遊離したものであるのに對し、自然集落である村はまとまりがよく、治安維持のためにはこれを單位とした方が適當だからである。城内の區劃である坊が、その點において同様であるのはいうまでもない。さらにいえば、從來は私的な存在であつた村が公的な制度として認められ、郷里制と併立されるようになったと解するのである。やはり通典の同じ卷にみえる「四家爲隣、五家爲保」という難解な一文についても、同様な立場からきわめて明快な解釋を下している。このわずか一家の差をもつてつくられた三種の組み合わせが、何の必要から生れたのか不可解とされていたが、著者によれば四家一隣は里に、五家一保は村または坊に屬するものとし、前者は行政上、後者は治安上の組織にほかならないと結論する。

第三章「宋及び宋以後の郷村形態」は、五代から現代にいたる期間をとりあつていて、本書全體の約半分を占める。この時期は前にくらべると文獻がはるかに豊富なばかりでなく、地方志という根本資料がそろっているから記述はにわかには復雜となる。時期が新しくなるとともにその數がふえるのは當然で、著者は長年にわたる

苦心の結果蒐集した龐大な資料を縦横に駆使して、時代と地方による鄉村形態の種々相を例示している。その主要なものを紹介するとさえここでは不可能に近いので、變遷のきわめて概略をのべればつぎのようなことになるのではないかと思う。五代から宋にかけて唐の郷里制は崩壊したが、郷という名稱だけはそのまま残り以後ながく縣の下的基本的な區劃となる。郷の下の組織には、北宋のとき王安石の實施した保甲法の影響によって都、保、甲といった名稱が用いられ、南宋になると地方區劃の名として廣く普及した。金が北宋の制度をうけついだのはいうまでもなく、元は金と南宋の制度を併用したのであって、郷の下に都という區劃が確立したのはこのときである。明の末端行政組織としての里甲制については、地方志をみると里は圖というばあいが多く、地域的には郷ごとにまとまって縣に所屬する形をとっている。清では明の里甲制によって租稅徵收を、保甲制によって治安維持を行うという二本建てを採用したが、康熙末年から戸口冊編造の必要がなくなるとともに、里甲制は崩れて自然集落をもとにした保甲法が全體を支配するようになったという。清末から民國にかけて行われた新制度についての紹介はここでは省略する。

第四章「中國鄉村制の日本への影響」は、大化の改新前後における日本の鄉村制の變動についてのべたものであるが、著者の力説されるのはつぎの諸點であらう。第一は成務天皇のとき中國の制度を輸入して地方制度の大改革を行い、とくに西晉の武帝の占田、課田法の影響によってこのときすでに條里制を實施したものと考ええる。第二はそのような改革の一連として、戸數による行政區劃も早くから行われ、少くとも安閑天皇のころには相當普及していたであらう。

第三は郡にあたる行政區劃である許はもともと三韓に行われた名稱であるが、三韓からの歸化人が増加するにしたがつてこの名は日本にも普及し、大化の改新にさいし公稱として郡の字を用いることに定められても、なおしばらく評の稱呼は行われていたとする。第四は大化の改新によって五十戸一里制が定められ、この里はのち元正天皇の靈龜元年に郷と改められたというのが通説であるが、それは誤りであって、これよりさきすでに和銅年間に改められることになったものと主張する。第五は餘戸里という獨特の制度が生まれた原因についての解釋で、これは日本で五十戸一里の制を實施するにあたり、唐の村制の條文を誤り引用した結果おこった現象であると言ふ。

第五章「都市區劃制の成立」では、まず古くから里と稱せられた都市内部の區劃は、北魏のころから坊ともいわれるようになるが、坊とは防衛の意味で、はじめは本城外に接續してつくられた里が、それ自體で城壁をもち防衛的にできていたからではないかという。これは隋唐以後はほとんど都市内部の區劃の公稱となった。唐の長安は中央の朱雀大街によって左街と右街の二大區域に分けられたが、五代になるとまず後梁の都である開封において廂という區劃がはじまる。廂とはもともとと軍隊の編成區分名であつて、その軍隊が都市内を分擔して巡察するところから、分擔區域に廂の名がついたのである。宋ではすでに太宗のときから開封の舊城内に二廂、新城内に六廂がおかれていたが、眞宗の大中祥符元年にいたり新城外にも治安維持の必要から新たに八廂が設けられた。城の内外を通じて廂がおかれたのは注意すべく、廂制は中央以外の大都市にも行われるようになる。南宋では臨安をはじめ各都市に隅という區劃が設けられ

たが、これは諸坊の隅角に防火用の望樓をつくりこれを中心とした消火區域が行政区劃に發展して廂に代つたものと考えられ、そののち主として南方各地に行われたのである。

以上は本書の内容のきわめて粗雑な紹介であつて、あるいは著者の眞意を誤つて傳へ、重要な點を見のがしたことも少くないかと思う。もしそうであれば、これはひとえにわたくしの能力が不十分なためであつて、著者ばかりではなく讀者にも深くおわびしなければならぬ。終りに讀了した結果、心に残つたことを少しばかりあげて著者の教えを仰ぎたいと思う。例えば、日本の條里制は明らかに中國になつたもので、古代中國には阡陌の制度が行われていたのであるが、日本の條里集落のようなものがはたして中國にもあつたかどうか。なかつたという説もあるが、それでよいのか。また新しいところでは、社會學的、地理學的に調査された現實の集落からさかのぼつて、その歴史的變遷や地方的特徴をしらべる考慮も必要ではないか、といった問題である。もちろん、これらはわたくしども後學に課せられた問題でもあつて、本書をこそ手がかりとして研究を進めて行かねばならないのである。

(日比野丈夫)

## 東洋社會經濟史序説

今堀誠二著

昭和三十八年九月 京都 柳原書店  
A5判 二〇二頁

東洋の社會經濟史を概括的にとりあつた書物が、學界に提示

されたのは久しぶりのことである。編集委員會がこの書物の批評・紹介をわたくしに依頼されたのは、數年前に明清時代の社會經濟史研究の動向をまとめたさいに、わたくしが本書の著者今堀誠二氏の「共同體」論に言及したことがあり(本誌二〇ノ一)、また最近はわたくし自身が土地問題研究へ接近する最初の試みとして范仲淹設置の義莊の變遷をたどつたさいに、ふたたび宋代いごの共同體について愚見をのべたことから(本誌二二の四)、中國における共同體轉變の總括的敘述を中心とする本書によつて、わたくしの共同體論への關心をさらに啓發してやろう、との親切によるものであらう。

今堀氏は中國の共同體研究においてつとに著名であるが、氏の共同體研究への確信が日中戰爭中の中國留學當時における、かの地での體験にふかく根ざしていることを氏は序文で回顧的に明かにされている。

本書は中國の共同體論においてすでに先驅的業績を世に問われてきた今堀氏が、今度補訂された既發表の論文六篇と新たに書き加えられた二篇をそれぞれ一章とし、全八章を一書にまとめたものである。通讀してみてもこの八章は三部に分かれたれているといつてよいと思う。第一、二章が冒頭部で、著者は第一章アジア研究史において「アジアとは何か」と設問され、フランス啓蒙思想家からマックス・ウェーバーに至る諸學説を批判されたのち、この疑問をひきついで、第二章アジア史の基本問題において著者みずからの基本課題を設定される。第二部は第三、四、五の三章で、ここで著者は第一章村落「共同體」において秦漢から清朝までつづいた中華帝國二千年の社會基盤としての村落共同體の展開諸段階を(一)氏族共同體